みやもとだより

第24号　平成30年5月発行

季節のおまつり

葵祭（賀茂祭）

京都に夏の訪れを告げる葵祭は、祇園祭、時代祭とともに京都三大祭に数えられている。葵祭は下鴨神社（賀茂御祖神社）と上賀茂神社（賀茂別雷神社）の例祭である。両社はもともと賀茂県主家を中心とする賀茂氏の氏神で、平安遷都以降は平安京と山城国の守り神として皇族に篤く信仰されてきた。平安時代、単に「まつり」といえばこの葵祭を指すほど盛大な祭儀であった。

祭の起源は、今から約千四百年前、凶作が続き飢餓疫病が蔓延した時に、欽明天皇が両神社に勅使を遣わし、「鴨（賀茂）の神」の祭礼を行って五穀豊穣を祈願したのが始まりといわれる。内親王が祭祀を司る斎王の制度があることから、葵祭は官の祭とされ、『源氏物語』や『枕草子』にも描写されている。古くは賀茂祭、または北の祭りとも称され、江戸時代より行列する衣冠装束の人々が葵の挿頭花で飾られることから、「葵祭」ともいわれるようになった。明治以降は戦争などで中断されることもあったが、毎年五月十五日に祝われる。

祭の朝、十時半より「路頭の儀」と呼ばれる行列が京都御所から出発する。行列は検非違使、山城使を先頭に馬寮使、牛車そして舞人、近衛使や陪従、内蔵使の本列に、斎王代をはじめとする女人の列が続く。鎌倉時代に斎王は途絶えてしまったが、昭和三十一年の例祭から斎王代として復活し、京都にゆかりの女性が選ばれるようになったという。十二単を着た優雅な斎王代は、まさに葵祭の華となっている。総勢五百人余りとそれに伴う馬約四十頭、牛車二基の行列は全長約一キロに及び、都大路を約八キロ練り歩く。下鴨神社を経て上賀茂神社まで参向し、それぞれの神前で「社頭の儀」が行なわれる。風薫る五月の空のもと王朝絵巻を見るようである。

（写真・文　宮本卯之助）

十二単を着た斎王代

藤の花飾りをつけた牛車

この国の佳き伝統とともに
宮本卯之助

浅草つれづれ

浅草神社・三柱の石碑

浅草神社は三社様とも称されるが、その関係性が分かる三柱のご祭神を祀った石碑が境内に建立された。推古天皇三十六年（六二八）三月十八日の早朝、檜前浜成・竹成兄弟が江戸浦（隅田川の下流の宮戸川）で漁をしていたところ投網に仏像がかかり、土地の長の土師中知がこれを尊い観音像と認め、槻の切株に安置し、自身の屋敷を寺に改め出家して深く帰依したのが浅草寺の起りとされる。寺に隣接する浅草神社には、この三人が神として祀られ五月には三社祭が行なわれる。中知の子孫は浅草寺に代々僧侶として仕え、明治の神仏分離令で矢野姓に改め浅草神社宮司職を継承してきたが、この度本来の「土師」姓を名乗ることになり、石碑は改姓を記念して建てられた。

（文　宮本卯之助）

祭りのはなし

四之宮

三社祭では三基の宮神輿が町中を渡御します。一之宮、二之宮、三之宮の御神輿に続いて、かつては四之宮が本社神輿として担がれていました。この御神輿は明治初年、田町の桝田さんという木箱屋さんが、そこの若い衆百人程とで造った町神輿でしたが家業が傾き、大き過ぎたことや担ぎ手の不足から浅草神社に奉納されたそうです。三社祭では氏子四十四ヵ町を東部、西部、南部と分けていますが、北部が無いこともあってこの御神輿を受入れ、東照宮の御神霊を移し「四之宮」として主に北部方面を中心に渡御されました。徳川家光公が寄進した文化財の三基の神輿と昭和初期に新調された渡御用の神輿三基と四之宮の全七基すべてが惜しくも戦災により焼失し、昭和二十五年に一之宮、二之宮が、昭和二十八年に三之宮が奉納されましたが、四之宮は幻の御神輿となりました。

世界の太鼓館

「世界の太鼓資料館 太鼓館」開館三十周年記念として貴重な収蔵品をご紹介。

トバイラ（別名 トビラート・タムタム）

モロッコの民族楽器トバイラはお椀型の陶器の胴とラクダの皮で作られた大小一対の太鼓です。皮面口径（大）十五／（小）九センチメートル、胴高十九センチメートル。座った状態で膝に挟み両手で打ち、民族音楽や祭典などで現在も演奏されます。鼓面の皮は細く紐状に切られた皮で締められ、高音の音がリズミカルな音楽を生み出します。トバイラの胴は素焼きの陶器で装飾のないものと藍色模様で装飾されるものがあります。装飾に使われる藍色は迷宮都市として文化遺産で有名な都市フェズのフェズブルーと呼ばれ、食器などの陶器によく使用されるモロッコ特有の色遣いで美しいブルーです。現地ではスーク（市場）や露店で売られ、すぐに見つけることができます。太鼓館では実物に触れながら、どなたにでも演奏していただけます。

以前に浅草神社の前で外国人観光客から「なぜ神社とお寺が隣り合わせにあるのか？」と質問されたので、浅草の歴史と神仏習合について簡単に説明しましたが何とも合点のいかない様子だったのを覚えています。日本では神仏の共存が千年以上続いてきました。その最古の例の一つがお神輿発祥の地宇佐。奈良東大寺の大仏建立を助けられた宇佐の八幡様のお御霊を、大仏開眼供養の折に紫の輿に乗せてお招きしたのが神輿の始まりと言われています。その際東大寺の鎮守として手向山八幡神社が創建されたように、延暦寺に日吉大社、興福寺に春日大社とお寺と神社が対を成す例は多く見られます。明治の神仏分離令によって現在のようになったのは長い歴史の中ではつい昨日の話。浅草の町にとっても観音様と神社は合わせて一つの精神的な柱として存在してきました。三柱の石碑はそんな町の歴史を伝えてくれます。

代表取締役社長
宮本芳彦

発　行

株式会社 宮本卯之助商店
企画広報室
〒一一一－〇〇三五
東京都台東区西浅草 二－一一－一一
電話　〇三－三八四四－二二四一
www.miyamoto-unosuke.co.jp